

仁波、今櫻皮有之と見え、萬葉六十八に、櫻皮カニバ纏マキツ作流舟ルルフネとよみ、古今集物名に、迦爾婆櫻あり、源氏
 などに、加婆櫻と、これらを合て思に、此木の本名は波々迦にて、迦爾婆は皮名なり、加婆は、加爾
 り、なさて皮を専ら用るから迦爾婆櫻と木の名にもなれるなり、か、れば和名抄に、邇波佐久
 良とあるは、今本加字の脱たること著し、古今集かにばざくらの註に、朱櫻とかけりと、顯昭が
 云るよくかなへり、然るを契沖が和名抄を引て、これ
 を誤なりと云るは、さて此に此木を取は、皮を燃して彼鹿の肩骨を灼む料なり、
 返てひがことなり、

○按ズルニ、朱櫻ヲ神占ニ用キル事ハ、神祇部太占篇龜甲篇ニ載ス、

〔採藥使記中奥州〕照任曰、奥州藪川ト云フ所ヨリ樺木ヲ出ス、土人はレヲシラカバト云フ、又御姫ガ
 嶽ト云フ所ヨリモ多ク出ス、

光生按ズルニ、今和邦ニカバト云フハ、櫻ノ一種ニテ所々ニアリ、シカレドモ本草ノ樺木ノ説
 ニ合ズ、甲州又信州飯田ナドニ多ク生ズ、土人カンバノ木ト云フ、此木ノ皮ヲ煎ジ、万ノ腫物ニ
 用ユルニ甚ダ妙アリトテ、甲州ノ人専ラ云傳フ、徳本ノ家方ナル由、

〔甲斐國志百二十三產物及製造〕一樺和名加波 本草釋名ニ樺木作檮、玉篇云、樺木皮名、可以爲炬者也、和名

鈔木具類ニ載セタリ、加波トハ皮ノ訓ナルベシ、或云茶褐色ト云ハ、因此皮色呼ナラント、徳本ノ
 藥方ニ樺皮散アリ、云華者モ蓋以此皮製ト云、樺爲樹名者非ナリ、先儒ノ説紛々一ナラズ、本州ニ
 所用ハ雨中ノ炬火トシ、驅鷓鴣爲川漁者ノ燭トスルハ、河内領ノ諸山ニ多シ、櫻類ニシテ麤木也、
 花モ所觀ナシ、凡ツ櫻ノ皮ハ外ハ横ニ理アリ、内皮ハ縦ナリ、此樹モ同ジ、故カバ櫻又カツバノ木
 ト呼ベリ、剝外皮爲炬ベシ、葺屋ニハ皮ヲ薄ク剥ギ葺テ、其上ニ小石ヲ並べ置クナリ、能ク久キニ
 耐フ、信州ニテカンバノ木、又白ハリトモ云ハ、檜ノ一種ニテ、毎年外皮自ラ剝ル木ナリ、皮色ハ外
 白シ、葺屋ニ良品ナリ、本州ノ川浦武川ノ諸山及ビ信州ニ多シ、赤杉檜ノ皮ニテモ屋ヲ葺ケリ、樺
 ドウラン 櫻ノ樹ヲ伐リ水ニ浸スコト度アリ、隨大小頭切シテ丸ナガラ皮ヲ拔キ、蓋及ビ底ヲ